

幼児のごっこ遊びの展開と絵本

～『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』の「対称的直接法」と「スクリプト機能」～

浅木 尚実

はじめに

幼児期には、遊びが、心身のバランスのとれた発達の基礎を培うものとして重要視されている。幼稚園教育要領¹の基本には、「遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成できるようにする」と明記され、保育所保育指針²の原理にも、「保育の方法には、子どもが自発的、意欲的にかかわれるような環境構成と、そこにおける子どもの主体的な活動を大切に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように遊びを通して総合的に保育を行う」と謳われている。教師が一方的に目的を持って指導する学習と違い、遊びは幼児の主体的な行動を軸としている。歴史的に見ると、中世までの子ども観では、子どもは6～7歳になれば大人の労働の一端を担う存在であった。しかし、義務教育化に伴い、学童期には学習を、幼児期には遊びを主体とする子ども観が一般化されてきた。遊びは、乳幼児の生活全体であり、遊び行為を通して幼児は生活のしかたを学んでいく。

ヴィゴツキーの発達心理学の流れをくむ中で、エリコニン³は、「人間の遊びとは、人々の中の社会的関係を再現する活動である」(p.29 エリコニン、2002)と結論づけている。

また、エリコニンは、すべての諸側面で遊びが役割と結びついた行為であり、子ども同士の関係も役割に基づいて決定されていることを指摘し、ごっこ遊びを「役割遊び」(以後、役割遊びとする)と称している。

役割遊びの中で行われる「今ここではない世界」の模倣は、発達心理学では、遅延模倣とよばれ、2歳前後から始まる現象として確認されている。実際の社会と矛盾しない遊びには、豊かな想像力が要求される。役割遊びは日常体験の模倣から行われ、ままごとやお店屋さんごっこ、乗り物ごっこ等、仕事や労働と結びついたものが多い。

本論は、都内S保育園の消防士ごっこの観察事例に基づいている。この事例では、保育士が準備した環境構成の中で、衣装や道具の他にイメージを作る情報が必要であることに気づかされた。特に集団遊びの場合、仲間同士で共有できるイメー

が必要である。エリコニンは、役割遊びが幼児期における重要な発達課題と考え、経験を通して得られたイメージが遊びを刺激することを力説している。

イメージ作りの有効な手段として、絵本に注目した。集団で絵本を共有することは、共通イメージを分かちあい、その後の遊びに展開させやすい。前述の消防士ごっこの事例の前に、消防士の仕事に対するイメージを提供する消防自動車の物語絵本を読み聞かせていたらどうだったのだろうか。イメージ作りの情報提供の手段として、アメリカの絵本作家ロイス・レンスキーによる『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』は、作者の息子が実際に遊ぶ姿からヒントを得たとされている。幼児には、専門的すぎるとも映る内容は、逆説的に幼児の役割遊びのイメージを与えるテキストにならないだろうか。

本論では、第1章で、役割遊びに関して、イメージの重要性を説き、絵本が幼児のイメージ作りのテキストになりうることを考察した。第2章では、絵本が幼児の体験となるために、絵本の物語がより読者に真実に感じられる^{モダリティ}様態を持つ必要性を考慮し、ニコラエヴァとスコットが『絵本の力学』で用いた「対称的直接法」を取り上げた。そして、第3章で、遊ぶために、出来事を時系列に整理したスクリプトⁱⁱⁱが、『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』の文章を構成していることに言及した。

役割遊びにおいて、模倣するための情報は、より真実味を帯びることによって、幼児にとって同一化しやすい装置となる。また、遊びを展開するために、ことばや仕事内容の把握は重要で、その情報は時系列にそって整理されていることが必要となる。役割遊びを協同遊びとして展開するためのテキストとなる絵本は、役割遊びの展開の一助となる要素を持たなければならない。事例で遊びこめなかった消防士ごっこに適したテキストは、『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』であると仮定した。本論は、『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のテキスト分析を行い、役割遊びの発展に貢献する要素を導き出すことが目的である。

第1章 事例から見る役割遊びと共通イメージ

1. 役割遊び

幼児教育現場や保育所では、幼児は集団で、役割を分担し、一つの遊びを仲間と展開していく協同遊びがしばしば観察される。同じ目的をもつ遊びを組織するためには、子どもの遊びに働きかけ、子どもの能力を引き出す手段として、ある程度の大人の援助が必要になってくる。あくまでも幼児中心に遊びが展開されるには、場所や時間を準備することが求められるが、遊び内容が共有される配慮も必要であ

る。遊びの援助における大人の役割は、脇役に徹することである一方で、遊び環境の整備や遊びに必要なイメージや情報を提供することが求められる。

幼児の遊びでは、ままごと遊びやお店屋さんごっこ、先生ごっこ、幼稚園ごっこ、病院ごっこ等、役割を分担して遊ぶ事例は数多く観察されている。こうした遊びは、日常的な体験から導き出せるイメージを基礎に展開する遊びであり、イメージを作りやすいと考えられる。たとえば、筆者が担当する保育士養成校の学生は、保育園での実習経験から、次のような5歳児のカフェごっこの様子をレポートで報告している。

実習先の保育園で5歳児がカフェごっこをしていた。お客で行ってみると「いらっしゃいませ～ご注文は何になさいますか？」と店員になりきった女の子が言ったので「何があるんですか？」と聞いてみた。すると「コーヒーでしたらアイスコーヒー、カフェラテ、キャラメルマキアートとかあります。紅茶でしたらハーブティ、オレンジティ、スペシャルブレンドティとかあります。」と答えた。素晴らしい。キャラメルマキアートなんてどこで覚えるのか。とりあえずカフェラテを注文してみた。すると「イートインですか？テイクアウトですか？」と聞かれた。すごい。(都内A保育養成校「卒業レポート集」より。2010年3月)

実習先が東京都港区という都市中心部の地域性からか、カフェでの様子が目に見えるようである。少し長くなるが、続きを引用すると下記のように発展していく。

せっかくだから店内でいただくことにした。するとウェイトレス役の女の子が「良かったらすごく美味しいオムライスもありますけど一緒にどうですか～？」と言ってきた。商売上手な店員さんにすすめられたのでオムライスもいただくことにした。しばらく案内された席で待っていたがなかなか注文した品が出て来なかった。するとさっきの女の子が近寄ってきて「すみませ～ん。今日キッチン一人しかいないから大変なんです～。」と言った。「良かったら出来上がってからおうちまでお届けします～。」なんとデリバリーもやってるらしい。そして私はデリバリーのカフェラテとオムライスを食べた。(都内A保育養成校「卒業レポート集」より。2010年3月)

この事例では、子どもの計り知れない観察力を通して、5歳児なりに創られたイメージを通して、ごっこ遊びの中で、カフェのウェイトレスの役割が見事な会話で

表現されている。幼児は、日常生活で経験可能な日常的な仕事内容を情報として認知し、イメージ化して遅延模倣として表すことができる。この意味で、幼児は驚くべき才能を持っているのである。

しかし、役割遊びの中には、幼児の日常的な知識や技能だけでは、遊びに反映しきれない事柄も想定される。子どもがあこがれる消防士や新幹線等の仕事は、経験不可能であり、非日常的な仕事内容の情報を得ることは難しい。しかし、幼児は身近ではない仕事を模倣することにも意欲的である。この点で、幼児の遊びの環境構成において、専門的な職業の情報提供を考慮に入れる必要があるのではないかと考えた。このことは、次にあげる事例から感じ取れたことである。

2. 事例から見る役割遊び

事例

日時：2010年7月

場所：東京都内S保育園

対象：年中・年長混合クラス（28名）

方法：「へんしん」をテーマにしたブックトークが中心のおはなし会を行い、その後、ごっこ遊び開始から終了まで、録音と写真撮影にて記録した。

分析内容

おはなし会の最後に変身用コスチューム作りの本を紹介した後、多くの男子は消防士に関心を持ち、消防士ごっこを始めたがった。男性保育士が、新聞紙と色テープを用意し、女子はフラダンスチームに、男子は消防士チームに分かれて製作を始める。最初は、消防士の帽子とホースを作り、火よけのマントも新聞紙で作り、ホースで仮想の火事に対して消火活動にあたり始めた。既にマスクをした年中のY太は、帽子に右から「京東」と書き、保育士に続けて「消防庁」と書いてくれるように頼みに来た。「庁防消京東」と書かれた帽子を得意げにかぶり、タンカーを作り始める。「ぼくは、救急隊員」といいながら、懸命にタンカーの補強をしている。Y太は一人で、人形の赤ちゃんを「緊急搬送だ」といいながら、運ぼうとする。すると、M夫とK介は手伝おうとするが、どう動いていいかわからない様子である。Y太のみ遊びに夢中で、M夫とK介は、ホースを手にしたまま、遊びに参加できないままである。Y太は、ままごとコーナーにタンカーごと赤ちゃんを運びこむと、「緊急手術です」といいながら、赤ちゃんに注射をし始めた。顔は真剣そのもの。これを何度も繰り返して遊んだ。ままごとコーナーは病院に早変わりした。最後にはM夫とK介も加わりY太の非日常的なY太の体験を模倣しながら再現し、手術ごっこへと展開するに至った。

3. 事例からの考察

この事例から、Y太には、以前から消防士に関する何らかのイメージがあって活動していたことが認められる。消防士として発生した火事の消火活動をした後、救急隊員として、けが人の救急搬送をし、病院ではけが人の手当てをするといった一連の流れによる遊びの展開ができていた。しかし、M夫とK介には、消防士の仕事へのイメージが足りず、火事現場にホースで水をかけるところで止まってしまっていた。仲間との協同遊びに発展するための環境構成のうち、物的環境としての道具は、変身用のコスチュームの本から準備できていた。しかし、この事例の前に行なったおはなし会では、消防士についての仕事内容の情報提供は行っていない。また、物語絵本によって遊びモデルの提示したわけでもなかった。そのため、Y太のみの一人遊びに終始し、M夫とK介との協同遊びは途中で途切れてしまった。この原因として二つのことが考えられる。一つには、この三人に消防士ごっこに関する共通のイメージがなかったことである。消防マントや消防帽子、ホース等の道具を製作したもの、消防士の仕事内容への知識や情報が不足し遊びこめていない。二つには、消防士になりきる体験が今までまったくなく、消防士の動きを時系列に整理できていなかった。従って、三人の役割分担も発生せず、M夫とK介については、イメージを持つY太の模倣をするのが精いっぱいであった。この事例から、役割遊びには、遊びモデルの提示と時系列の整理された仕事内容の情報が必要であることが推察できる。このことを裏付ける例として、以下の二人の研究者の事例を紹介したい。

役割遊びの展開において、高橋たまきは、自身の観察事例から、乗り物ごっこをする兄弟の動きを次のように記録している。

三歳と五歳の兄弟が「乗物ごっこ」をする。この兄弟は、遊びの中でも「きょうだい」の役割をとる。二人は「休暇」を利用して、「大阪」の「おじいちゃんの家」へ行くことを決める。積木の「バス」に乗って、「東京駅」へいく。兄の方が「バスの運転手」に早変わりする。弟は「乗客」として「料金徴収器」に「コイン」を入れるふりをする。バスはノンストップで、「東京駅」へ着いた。再び、「きょうだい」に戻り、二人で「新幹線」に乗車。再度、兄が「新幹線の運転手」を演じる。「新幹線の運転手」は「帽子」をかぶり、(かぶるふりのみ)、手袋をはめる(手袋は父親の正装用のお古)。この例は、「乗り物ごっこ」の「バス」と「新幹線」を時間順序に組み立てたものである。(p.94 高橋、1984)

この事例は、おそらく兄弟で大阪の祖父の家にバスと新幹線に乗り継いで訪れた体験がもとになっているのであろう。兄がバスの運転手になれば、弟はお客になり、兄は、新幹線の運転手にも早変わりを行っている。共通体験をしていた兄弟だからこそ、共有しているイメージに従って、時系列に沿ってスムーズに遊びこめたことが観察されている。しかし、エリコニンは、保育園の子どもたちを二度鉄道体験させた後も、役割遊びに発展しなかった事例を報告している。

別荘に行った時、子どもたちは鉄道について数多くの鮮明な印象を得た。子どもたちは駅に行き、汽車を見、乗客が列車に乗るのを観察し、自分でも席に腰かけ、発車を告げるアナウンスも聞いたし、両親と一緒に窓口で切符も買った。これらの経験は「鉄道ごっこ」の遊びがうまれるためにまったく十分であると保母は事前に想定していた。しかし旅行から得た印象は十分に強かったにもかかわらず、遊びは発生しなかった。(p.43 エリコニン、2002)

この後、もう一度、子どもたちは鉄道の駅への補足見学を行い、鉄道生活の事物的側面の情報を得るが、遊びの発生をもたらさなかった。別荘で夏を過ごし、家に帰ってから十分な時間の経過の後、再び鉄道現場に訪れた子どもたちの様子をエリコニンは次のように報告している。

この同じグループの子どもたちは鉄道の駅に再び見学に行った。この見学の時には子どもたちは駅長がどのように到着する各列車を迎えるのか、乗客はどのように列車から降りるのか、貨車から荷物をどのようにおろすのか、機関士と助手は機関車の手入れをどのようにするのか、労働者は車両をどのように点検するのか、掃除人はどのように清掃し、旅をする乗客に役立っているかを知った。駅の構内では、乗客の切符の買い方、赤帽さんが乗客をどのように迎え、荷物を運ぶのか、掃除人はどのように清潔なホールにしているかなどを子どもたちは観察した。この見学のあとでは、すぐに子どもたちは「鉄道ごっこ」での遊びが発生した。子どもたちは大いに満足して遊んでいた。「鉄道ごっこ」は長い間、子どもの遊びの中に生き続け、しばしば他のテーマの遊び—「お家ごっこ」、「幼稚園ごっこ」、「郵便局ごっこ」などと結びつけられ、一つの全体を構成した。(pp.43-4 エリコニン、2002)

この事例から、エリコニンは、保育士や大人は、子どもたちの役割遊びを発展させるためには、労働や労働する人々について、子どもたちのイメージをひろげ、正

確にしなければならないことを指摘している。

イメージとは、「目の前に存在しない事物を想定したり、事物間の関係をつけたりする精神機能」と定義^{iv}されるが、このイメージの原型は、1歳半頃から見られる。イメージは、「遅延模倣」として確認され、「いま・この世界」を超越した広い「想像の世界」での体験へとつながっていく。こうした想像世界は、何らかの経験や体験が基礎になっており、ヴィゴツキーは、想像と経験の相互依存の関係を指摘している。子どもは、自分の体験からイメージを獲得し、想像力を飛躍的に発達させていく。

子ども自らの経験の中に、絵本でのイメージ体験を含むことは可能だろうか。次章では、現実に近い体験を可能にする「対称的直接法」について考察する。

第2章 絵本の^{ミメシス}模倣と^{モダリティ}様態

1. 絵本における「模倣的—写実的—な再現」

子どもは、日常的な体験から多くの知見を得て、日々の成長発達の糧としている。しかし、日常体験には限界があり、時間的あるいは社会的制限から窺い知れない世界も存在する。子どもの豊かな想像力は、絵本や物語を通しての体験からでも、遊びの世界を導き出すができ、その役割が功を奏することがしばしばある。

ニコラエヴァとスコットは、絵本に言語学の^{モダリティ}様態の概念を使い、絵本には絵とことばの相互作用により、次の二つすなわち「模倣的—写実的—な再現」と「非模倣的—象徴的—な再現」の機能があると述べている。前者の「模倣的解釈」の場合、受けとった情報は現実だと解釈され、「こんなことが起こった」というセンテンスは「対称的直接法」と称される。後者の「非模倣的解釈」の場合、可能性や不可能性、願望、必然と解釈され、「対称的願望法」と表現される。絵本では、ことばと絵の相互作用によって複雑な^{モダリティ}様態が可能になり、その結果、「模倣的解釈」をすべきか、「非模倣的解釈」をすべきか、読者が判断できるようになるというのである。

ニコラエヴァとスコットは「リッランとネコ」を例にあげて、次のような解釈を行っている。

必要な事柄以外には背景も細かい描写もない、非常に単純な絵であり、模倣的な解釈をするべきなのか、象徴的物語な解釈をするべきなのか、絵のなかにはその手がかりが何もない。語り手と読者が最初に交わす「この虚構の物語のなかで起こるお話は、すべて本当のことだ。」という約束はすべて守られる。し

かし、おとなの——あるいは客観的な——解釈をすると、この物語はこどもの“ごっこ遊び”なのだとすることもできる。リッランとネコが旅の途中で出会う登場人物は、すべて子どもの日常生活にありそうなものばかりだ。(p.242 ニコラエヴァ、スコット、2011)

日常でありそうなことが、物語で表現されたとき、登場人物に同一化することによって現実として体現される。この物語の体現が、「対称的^{モダリティ}直接法」としての様態の概念であり、役割遊びを通して「こんなことが起こった」現実として解釈していく。

2. 「未熟な読者」と登場人物への同一化

ニコラエヴァとスコットは、子ども読者を「未熟な読者」と呼び、子どもは大人と比較すると、登場人物により同一化しやすい読み方をすると述べている。幼児は、絵本体験をするとき、しばしば、絵本に描かれている登場人物や出来事を自分のこととして同一化しながら、体験していることが報告されている。田代康子は、『おおかみと七ひきのこやぎ』を読み聞かせた際、子どもたちがしゃべった言葉の意味を「どの登場人物の立場になって」発言しているかの分析を行っている。

初回、子どもたちは読者という位置で、オオカミと子ヤギ双方の事態を知ることによってハラハラドキドキしました。つぎには、事態の進行を描いている文を自ら読み手になって緊迫感あふれる言い方をすれば、ハラハラドキドキでき、さらには、登場人物の立場で演ずるとハラハラドキドキできるかのようです。(p.193 田代、2001)

絵本の「模倣的解釈」に従えば、幼児はしばしば、読んでいる絵本の登場人物に同一化する。この現象は、前述書にも「実証的な研究が繰り返し証明しているように、未熟な読者は作品を模倣的に解釈する傾向があり、主人公と同一化して、その視点を共有する。」(p.238 ニコラエヴァ、スコット、2011) と述べられている。

未熟な読者が登場人物に同一化して読むとき、絵本は、「模倣的—つまり写実的な—再現」(=模倣的解釈)により、幼児にとって、現実と受け止められる。この際、絵本の役割として、事物の知識を与える科学絵本や事物絵本ではなく、現実を生き抜く主人公の装置が必要となる。

実際の労働を描いた絵本は希少であるが、息子のごっこ遊びを目の当たりにして、創作されたロイス・レンスキーの「ちいさいスモールさん」シリーズは、役割

遊びのテキストとなりうる内容ではないだろうか。

3. 「ちいさいスモールさん」シリーズ

ロイス・レンスキー (Lois Lenski 1893-1974) による「ちいさいスモールさん」シリーズ (Mr.Small Series) (表1) は、1934年に最初の絵本、『ちいさいじどうしゃ』*The Little Auto* が出版されて以来、70年以上も出版され続けているロングセラーである。アメリカ、オハイオ州で生まれたレンスキーの挿絵を含めた100近い作品の中でも、9冊の「ちいさいスモールさん」シリーズは、同作品が1971年に日本に邦訳されて以来、40年が経過し、2005年には、カラーの新版によってリニューアルされている⁵。ストーリーはいたって単純であるが、スモールさんが車や汽車の運転手、航海士、農夫、消防士、カウボーイそして警察官と幼児の中でも特に男の子があこがれる職業に従事する姿が克明に描かれている。

光吉夏弥は、『絵本図書館』の中で、『ちいさいじどうしゃ』の成功を皮切りに、「ちいさいスモールさん」シリーズは、ヨット、飛行機、消防自動車と、知的な内容をもった一連の乗り物絵本に発展したと述べている。しかし、乗り物絵本の枠にとどまらないのは、このシリーズが、スモールさんが大人の姿をしているものの、幼児にとって同一化しやすく、特に男の子が夢中で遊ぶ消防士や機関士として設定されていることである。

レンスキーの4歳の息子の遊びにヒントを得たとされるこのシリーズであるが、専門的な用語やリアルな仕事内容の描写は、難しく専門的すぎるといった印象を受けるかもしれない。しかし、子どもの絵本だからといって手を抜かない創作態度は、子どもの遊びに強い影響を与えられられる。

瀬田貞二は、『絵本論』の中で、「小さな本の大きな世界〈スモールさん〉」と題して、次のように述べている。

スモールさんと自動車。ガレージ。注油。空気入れ(手押しですよ)。水さし。出発。後退。警笛。犬より速く。馬車をぬいて。上り坂、下り坂(ユーモラスな見開き)。町へ。信号。大通り。スタンド給油。電車まち。買物。信号。パンク。タイヤの入れかえ。格納。おしまい。これだけの場面割りのメモをみれば、どれほど自動車の基本が、たくみに大づかみに、ことごとく肝心なことだけ取り入れられているかが、おわかりになろうと思います。つまりロイス・レンスキーは、小さいスモールさんを使って、小さい人たちに、その関心と必要に応じたもっとも簡潔な「はっきりさせ」方をこころみたのです。そし

て、これほど根本だけを大きくまとめるには、質のよい頭脳がいることでしょうし、また肝心なことだけを過不足なく描いて、よけいな厚化粧をしないためには、清潔な自信が必要だっただろうと考えます。(pp.226-7 瀬田、1985)

「小さな本の大きな世界〈スモールさん〉」とは、版型が横 21 センチ、縦 18.5 センチの小さなサイズでありながら、主人公スモールさんが、大きな世界、未知の世界を体験しているという意味であろうか。内容的に幼児が体験できない世界へと視野を広げ、幼児の心をとらえてきた「ちいさなスモールさん」シリーズであるが、絵本が絵とことばの相互作用による表現との観点から、瀬田は、絵についても読者を魅了してきた要因があると指摘して、次のように述べている。

レンスキーの絵には、主題が注目をひくために、線と色と構図をそこに集中しているのですが、その収斂的な簡潔さがみごとで、それをさまたげるよけいなものがないのです。ただし、細部はふんだんにあります、レンスキー風の矩形と円の図形的描法は、とにかく全体を単調にしてしまいがちなものですが、まずレンスキーは、その単調化をストーリーのすこしの変化ですくい、単色と二色のあしらいですくい、絵のなかの動きとユーモアと構図の方向づけの変化などにより、本の流れにリズムを与えることによってすくっています。(pp.226-7 瀬田、1985)

色調は決して派手でなく、二色の色使いを基調としていながらこそ、絵の中の「動きとユーモアと構図」が幼児の目を捉えてきたのかもしれない。近年、日本に著作権が残る「ちいさいしょうぼうじどうしゃ」以外が、カラー化されたことは残念であるが、幼児がこの本を支持してきた一番大きな興味関心は、そのテキストの具体性と理解しやすさではないだろうか。瀬田が指摘したように、「収斂的な簡潔さ」「さまたげるよけいなものがない」シンプルな絵が、文章にもそのままあてはまる。出来事を時系列に淡々と記していくテキストの文章は、絵と表裏一体となり寸分違わず進行しており、テキストもまた、「収斂的な簡潔さ」「さまたげるよけいなものがない」シンプルな形態を特徴としている。

第 2 章では「ちいさいスモールさん」シリーズに「対称的直接法」が適用されることがわかった。次章では、「ちいさいしょうぼうじどうしゃ」のテキストを分析した。そこには、幼児が出来事を整理して遊ぶために必要な時系列のテキストとなりうるスクリプトとしての機能が見られたのである。

第3章 役割遊びの誘発モデルとしてのスクリプト

1. 食べやすいメニュー：スクリプト

小川博久は、学校教育における学習システムを、「成人期に必要な知識の基礎を一人ひとりの知恵として食べやすいようにする仕組み」として「一人ひとりの身体がそのメニューを食べたがっているか否かは二の次で、一般的定食メニューで提供するシステムである^{vi)}」と述べている。この喩えを用いるなら、大人の仕事内容を食べやすいメニューにして幼児期の子どもに提供しているのが、「ちいさいスモールさん」シリーズではないだろうか。このシリーズはレンスキーの息子ステファンの興味、関心に促されて誕生した。レンスキーは、インタビューに答えて次のように述べている。

ステファンとかれの小さな仲間たちは、いつも自動車ごっこをしていました。三輪車でも、ワゴンでもなんでも仮想の自動車になり、家の中だろうと、外だろうと、ところかまわず運転してまわるのでした。そして、やれ、タイヤにもっと空気を入れなくちゃとか、ガソリンを補給しなくちゃとか、ぬかるみにはまっちゃってうごけなくなっちゃったとか、夢中でやっているのです。ほかの遊びはなにもしないで、しょっちゅう、自動車ごっこばかりなのです。しかも、女の子が人形を擬人化して遊ぶようなやり方でなく、自分で自動車を運転しているようなつもりになって、あれこれやっているのですから、そうした興味にこたえる技術的な知識も盛り込んだ本をと思って、「ちいさいじどうしゃ」をつくったのです。(pp.109-10 光吉、1990)

こうした背景から生まれた「ちいさいスモールさん」シリーズは、環境の中で幼児たちの主体的な役割遊びを誘発するモデルになりうる存在である。第1章では、4歳児の子ども共通体験が不足していたために、協同遊びに発展しにくかった事例を紹介した。消防士ごっこの役割を描いた「ちいさいしょうぼうじどうしゃ」は、テキストの中にスクリプト機能が認められる。スクリプトとは、シャンクとエイベルソンによって1977年に提唱された認知心理学用語であるが、「ある典型的な状況で生起する一連の事象を時系列に従って記述した文脈」（『心理学辞典』1999）として表現したものである。たとえば、レストランでの食事の流れの概略を時系列に沿って表すと、「入店⇒席に着く⇒メニューを見る⇒注文する⇒食べる⇒支払う⇒店を出る」となる。この一連の流れを文章化したものがスクリプトとして説明で

きる。出来事が時系列に整理され、理解しやすく、また再現しやすい脚本の流れのような効果があることがわかる。従って、子どもは絵本のスクリプト効果によって、理解を助けられ、事象をより現実に近い体験として再現しやすいものにしていくことができる。テキストにスクリプト効果があると仮定した『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』はどのようなテキスト構造をしているのであろうか。

2. 『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のテキスト分析

スモールさんを主人公とする『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のテキストの中から出来事を抽出して時系列に沿って並べると、次のように整理できる。

『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のスクリプト

名称：消防署

道具：消防自動車（ポンプ車）、ポンプ、ホース、鐘、ヘルメット、防火服、消火栓、放水口、鳶口と斧、ソファー、電気スタンド、テーブル、椅子

登場人物：スモールさん、消防士、家事現場の住人、逃げ遅れた女の子、犬のティンカー

条件：火事が発生する。逃げ遅れた女の子がいる。

結果：火事の家は消火される。女の子は救助される。

消火活動のスクリプト

場面1：消防署の紹介

- ・スモールさんと小さい消防自動車は、消防署に待機している。
- ・ポンプ車である小さい消防自動車は、エンジンを使って水を吸い込みはきだす。
- ・はしごと長いホースを車体に積んでいる。

場面2：火事発生

- ・消防署の二階で寝ているスモールさんは、出動のベルがなると飛び起きる。
- ・火事の現場を確認する。

場面3：出動

- ・ヘルメットをかぶり、防火服を着て、運転席に飛び乗り、エンジンをかける。
- ・他の消防士達も走ってくる。
- ・犬のティンカーも走ってくる。
- ・消防自動車は道路に出る。
- ・鐘をならしながら、消防自動車は、通りを走りぬける。
- ・カンカンカンカンと鐘を鳴らし、ウーウーウーウーとサイレンを鳴らす。

場面4：火事の現場に到着

- ・消防自動車は、火事の現場に到着する。

- ・現場の家の入り口や窓から煙が出ている。
- ・消防自動車は、消火栓の横で止まり、ホースを下ろす。

場面5：消火の準備

- ・消防士達は、下ろしたホースを火元に向けて伸ばす。
- ・スモールさんがホースの先にノズルをはめ込み、反対の端をポンプの放水口につなぐ。
- ・ポンプの吸い込み口と消火栓をホースでつなぐ。

場面6：消火作業

- ・「うちの中へ入れ！」と、スモールさんは叫ぶ。
- ・消防士達は、鳶口と斧を持って、玄関から入る。
- ・「ポンプ動かせ！」と、スモールさんは命令する
- ・「放水開始！」とポンプが動き始める。
- ・ホースの筒先から、水がほとぼしり出る。
- ・住人は、ソファーや電気スタンドや、テーブルや、椅子を運び出す。

場面7：逃げ遅れた女の子発見

- ・消防士が火元が台所であることを発見する。
- ・スモールさんと消防士達は、ホースを抱えて、裏口に回り台所に飛び込む。
- ・小さい女の子が、「ママ！」と二階の窓から助けを呼んでいる。

場面8：女の子の救助

- ・「はしごをかけろ！」と、スモールさんは命令する。
- ・消防士たちは、急いではしごをかける。
- ・スモールさんは、はしごを上り、窓から女の子を抱き上げて下まで下ろす。
- ・女の子はお父さんお母さんの所へかけていく。
- ・みんなで大喜びする。

場面9：消火の最終段階

- ・スモールさんは、斧を持ってはしごを上る。
- ・スモールさんは、屋根に穴をあける。
- ・消防士達が、はしごの上にホースをあげると、スモールさんは、穴から水をかける。
- ・白い煙が立ち上り 火が消える。

場面10：消火確認

- ・「火は消えたぞ！」「ポンプ止めろ！放水やめえ！」と、スモールさんは叫ぶ。
- ・消防士たちは命令通りに水を止める。
- ・ホースや他の道具を消防自動車に乗せる。
- ・犬のティンカーは、運転席に座ったまま待っている。

場面11：後片付け・帰還

- ・「火事は消えました！もううちの中へ入っても大丈夫です」と、スモールさんは言う。
- ・住人は、ソファや電気スタンドや、テーブルや、椅子をうちの中へ運び込む。
- ・消防車はゆっくり走って、消防署へ帰る。

3. スクリプトのテキストとしての『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』

『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のテキストには、スモールさんが消防署から火事現場に出動し、どのような言動によって消火活動を行い、女の子を救助するにいたるかが、時系列に整理されている。場面1から場面11までの出来事を追うと次のようになる。

消防署の紹介⇒火事発生⇒出動⇒火事の現場に到着⇒消火の準備⇒消火の準備
⇒消火作業⇒逃げ遅れた女の子発見⇒女の子の救助⇒消火の最終段階⇒消火
確認⇒後片付け・帰還

この場合のテキストは、ことばだけではなく、絵によっても同様の内容が表現されている。図1は、表紙であるが、スモールさんが、仲間の消防士とともに、消防自動車に乗って、現場にかけつける様子が描写されている（場面3）。また、図2は、現場に到着した後、火事の家を消火のための消火栓とホースをつなぐ準備行動が図示されている（場面4）。

最後に二階から逃げ遅れた女の子をスモールさんがはしごを使って救助する様子（場面8）が描かれ、物語が真実味を帯びて伝わっている。『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』のテキストは、絵と文章の相乗効果によって、スクリプトと共通する特色が見いだせる。幼児は、絵本『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』の読み聞かせを受ける過程で、行動の柱となるスクリプトの展開によって、自らのイメージとして想像し、後に遅延模倣として役割遊びにつなげていくのではないだろうか。

4. まとめ

レンスキーの『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』は、ことばと絵との相互作用によって、「対称的直接法」が表現され、おはなしの世界を真実の世界のように、幼児に提供していることに気づくことができた。また、この絵本がテキストとして「スクリプト機能」を持ち、役割遊びの展開を助けるテキストとなる可能性を見出した。レンスキーの息子のステファンが繰り返し遊んだように、役割遊びには、幼児を魅了してやまない面白さが存在する。決して派手な印象ではない「ちいさいスモールさん」シリーズが、初版から70年以上の長期にわたって、子どもたちに支

持され続けてきた背景には、子どもが遊びやすい情報を、子どもが理解しやすいだけでなく、きちんと手の届くかたちで提供してきたからではないだろうか。子どもの役割遊びの展開の一助として、環境構成が大人の重要な役割とするならば、子どもが日常的に体験しにくい職業に関して、現場での体験学習や見学が第一に望まれることではあるが、日常的にも、絵本という媒介物を物的環境として、子どもの周囲に準備しておくことも欠かせない大人の役割だということを忘れてはならない。

今回は、レンスキーの「ちいさいしょうぼうじどうしゃ」の「対称的直接法」と「スクリプト機能」について考察したが、今後は、他の「ちいさいスモールさん」シリーズも検証しながら、このシリーズが持つ「対称的直接法」や「スクリプト機能」が、実際に子どもたちが行う役割遊びの中でどのように機能し、展開していくかを探究していくことが課題であると考えている。

(本論は、2011年6月11日、大正大学にて行われた「第14回絵本学会大会」における口頭発表「ごっこ遊びと絵本」を基に加筆修正したものである。)

〈注釈〉

- i 【幼稚園教育要領】 文部科学省 平成20年3月
- ii 【保育所保育指針】 厚生労働省 平成20年3月
- iii 認知心理学用語スプリクトは、ある典型的状況で人間が想起する一連の手続きを表現する方法として、シャンクトエイベルリンによって考案された。
- iv 村田孝次『児童心理学入門 三訂版』培風館、1990年
- v 『スモールさんはおとうさん』のみ、童話館出版から2004年(原書1951年)に出版されている。
- vi 「日本保育学会第64回大会 発表要旨集—遊びの保育において保育者の役割はどうあるべきか」企画・提案者：小川博久

〈使用テキスト〉

レンスキー、ロイス「ちいさいしょうぼうじどうしゃ」わたなべしげお訳、福音館書店、1970

Lenski, Lois, *The Little Engine*, Henry Z Walck, New York, 1946

〈参考文献〉

- アリエス、フィリップ『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』
杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980
- アロセニウス、イーヴァル『リッランとねこ』ひしきあきらこ訳、福音館書店、1993
- エリコニン、デ・ベ『遊びの心理学』天野幸子・伊集院俊隆訳、新読書社、2002
- エリス、M.J.『人間はなぜ遊ぶか：遊びの総合理論』心理学選書2、森 林・大塚忠剛・
田中亨胤訳、黎明書房、2000
- カイヨワ、ロジェ『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社、1990
- ガーヴェイ、C.『「ごっこ」の構造—子どもの遊びの世界』高橋たまき訳、サイエ
ンス社、1980
- グリム『おおかみと七ひきのこやぎ』フェリックス・ホフマン絵、せたていじ訳、
福音館書店、1967
- 瀬田貞二『絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集』福音館書店、1985
- 高橋たまき『乳幼児の遊び—その発達プロセス』新曜社、1984
- 田代康子『もっかい読んで！—絵本をおもしろがる子どもの心理』新保育論6、ひ
となる書房、2001
- ニコラエヴァ、マリア・スコット、キャロル『絵本の力学』川端有子・南隆太訳、
玉川大学出版部、2011
- 中島義明他編『心理学辞典』有斐閣、1999
- 西村清和『遊びの現象学』勁草書房、1989
- ハリスン、モリー『こどもの歴史』藤森和子訳、法政大学出版局、1996
- ピアジェ、ジャン・エリクソン、エリック・ピアース、マリア『遊びと発達の心理
学』心理学選書4、赤塚徳郎・森 林訳、黎明書房、2000
- ホイジンガ、J.『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳、中央公論社、1971
- 丸山良平・横山文樹・富田昌平『保育内容としての遊びと指導』建帛社、2003
- 光吉夏弥『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』ブック・グローブ社、1990
- 村田孝次『児童心理学入門 三訂版』培風館、1990
- 八木紘一郎編著『ごっこ遊びの探究—生活保育の創造をめざして』新読書社、1992

〈謝辞〉

本研究において、ご協力いただいたS保育園の園児、先生、職員の皆様へ心より感謝申し上げます。また、実習での報告を快く提供してくれた学生にもお礼申し上げます。

表1: ロイス・レンスキー (Lois Lenski 1893-1974) 作品リスト (原書出版年順)

タイトル	訳	出版社	出版年(原作)
ちいさいじどうしゃ	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1934)
ちいさいヨット	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1937)
ちいさいひこうき	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1938)
ちいさいきかんしゃ	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1940)
スモールさんののうじょう	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1942)
ちいさいしょうほうじどうしゃ	わたなべしげお	福音館書店	1970 (1946)
カウボーイのスモールさん	わたなべしげお	福音館書店	1971 (1949)
スモールさんはおとうさん	わたなべしげお	童話館出版	2004 (1951)
おまわりさんのスモールさん	わたなべしげお	福音館書店	2005 (1962)

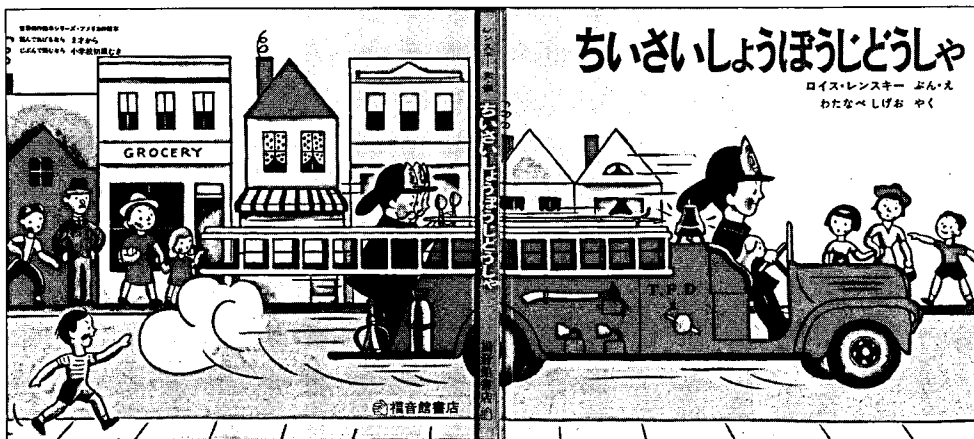


図1: 表紙/裏表紙 ロイス・レンスキー「ちいさいしょうほうじどうしゃ」福音館書店

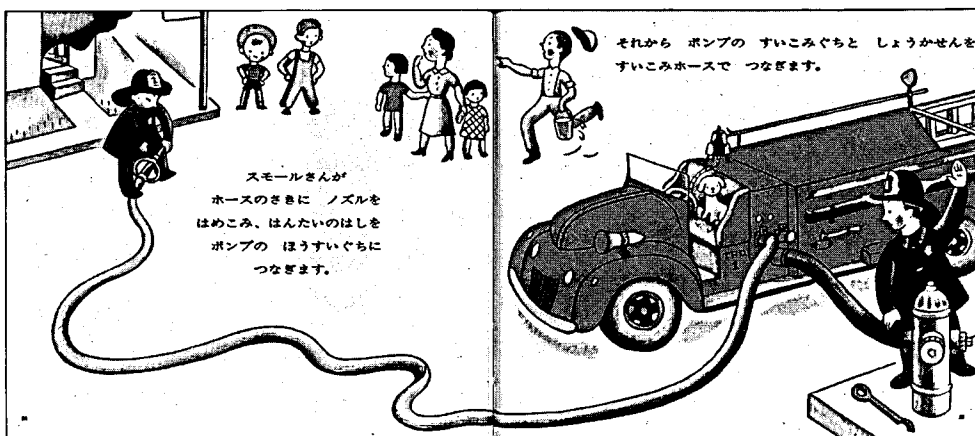


図2: pp.24-5 ロイス・レンスキー「ちいさいしょうほうじどうしゃ」福音館書店



図3: pp.36-7 ロイス・レンスキー『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』福音館書店